

2004 年

～定期点検の実施を前提にクロススクリーンの性能を確保～

「耐火クロス製防火・防煙スクリーン技術標準」発刊のお知らせ（3月）

現在、性能規定化の中で個別に国土交通大臣認定が行われている「耐火クロス製防火・防煙スクリーン」（以下クロススクリーン）に関して、当協会ではこのほど「技術標準」の策定を終え、「耐火クロス製防火・防煙スクリーン技術標準」として刊行することになりました。

クロススクリーンの設置にあたっては、強度や耐久性など、劣化状況についての把握等の維持管理が防災上重要であることから、定期的な保守点検を必ず実施することを前提としています。そのため、「技術標準」の他に、「定期点検基準」「施工基準」を定め、クロススクリーンの性能を確保するための自主的な取り組みを実践しています。

<参考>

・都道府県建築主務部長他あて「耐火クロス製防火・防煙スクリーン技術標準」等の策定について (PDF)

http://www.jsd-a.or.jp/wp2/wp-content/themes/shutter/pdf/0404_6.pdf

防犯性の高い建物部品目録の公表について（4月）

平成 15 年 4 月 1 日付けで、「防犯性能の高い建物部品の開発・普及に関する官民合同会議」（警察庁、国土交通省、経済産業省及び民間関係団体で組織）より、「防犯性能の高い建物部品の開発・普及の今後の在り方」及び「防犯性能の高い建物部品目録」が公表されました。

この中で当協会の関連するものとしては、別紙のドア（B種（スチールドア））、窓シャッター、重量シャッター、軽量シャッター、シャッター用スイッチボックスの 5 種類について、該当企業およびその商品名が公表されました。

当協会では、これまで会員企業以外を含めての防犯性能試験の窓口となり、これらの予察試験、予備試験の結果を踏まえ、5 分を超える抵抗力のある部品開発を行うとともに、それぞれ所要の性能が確保できる仕様の取りまとめを行ってまいりました。

また、これに基づき平成 15 年 11 月から 12 月にかけて、会員関係者等に防犯性能試験の申請説明会を行い、申請受付後、合同試験の申請があったものから抽出した代表試験体について、定められた試験会場において本試験を実施してまいりました。

この結果、官民合同会議・試験委員会において、判定基準に基づき試験結果を判定し、合格したものが、「防犯性能の高い建物部品目録」として取りまとめ、この度、平成 16 年 4 月 1 日付けで、官民合同会議の事務局である警察庁から公表されました。

官民合同会議は、今後も引き続き存続され、新しく開発された部品の性能試験を実施し、防犯性能の高い建物部品の普及を更に推進することとなりました。

また、関連商品の今後の防犯性能の試験の申請窓口、試験の実施等は、従前のおり当協会が行いますので、当協会としては、今までの組織を維持し、万全な体制を整えて臨んでまいります。

■防犯性能の高い建物部品目録（PDF）

- ・軽量シャッター http://www.jsd-a.or.jp/wp2/wp-content/themes/shutter/pdf/0404_01.pdf
- ・重量シャッター http://www.jsd-a.or.jp/wp2/wp-content/themes/shutter/pdf/0404_02.pdf
- ・シャッター用スイッチボックス http://www.jsd-a.or.jp/wp2/wp-content/themes/shutter/pdf/0404_03.pdf
- ・ドア B 種（スチールドア） http://www.jsd-a.or.jp/wp2/wp-content/themes/shutter/pdf/0404_04.pdf
- ・窓シャッター http://www.jsd-a.or.jp/wp2/wp-content/themes/shutter/pdf/0404_05.pdf

■JSDA 会員専用サイト

<http://www.jsd-a.or.jp/member2/member/>

防火、そして環境・都市の未来とは！ (1月)

東京大学名誉教授 東京理科大学教授 菅原 進一氏 VS (社)日本シャッター・ドア協会会長 岩部 金吾

岩部 明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

菅原 おめでとうございます。よろしくお願いいたします。

岩部 昨年秋でしたが、先生が東京大学教授を3月に退官され、その退官記念講演会にお招きいただきましたが、大変盛況でしたね。私はとくに講演会で、現在では各方面で活躍されている先生の教え子の方々が交代でパワーポイントを使って短い講義をされ、最後に菅原先生が講演をされて締め括るわけですが、その流れが何ともコミュニケーションを大切にされる菅原先生らしく、温かい雰囲気、大変心地よく聴かせていただきました。

菅原 恐れ入ります。

岩部 さて、本日はありがとうございます。先生には多方面に亘って大変お世話になっておりますが、現在、当協会でも最も力を入れている防火シャッター・ドアの保守・点検の促進については、何と云っても、2001年9月の新宿雑居ビル火災が大きなキッカケでした。その対策では菅原先生が関係省庁の委員長・会長をされ（「小規模雑居ビルの建築防火安全対策検討委員会委員長」〔国土交通省〕、「小規模雑居ビルの防火安全対策に関する答申：消防審議会会長」〔消防庁〕）、御尽力されたわけですが、あの火災は、われわれに非常に大きな教訓を残しました。この問題を中心のお立場で検討されてきた先生としては、いかがでしょうか。

菅原 そうですね。新宿の雑居ビル火災についてはいろいろな取りまとめを仰せつかってきたわけですが、当時から、大きな意味で点検のあり方が根本的に問われているのではないかと感じていました。少しさかのぼりますが、日本が高度成長、そしてバブル期にかけて膨大なビルや住宅を造ってきたわけですが、とくに都心には大小のビルが林立しました。それらのビルがいま老齢期に差し掛かっていて、人でいえばお医者様の治療が必要な時期を迎えています。しかし、ビルをどう治療して維持させて行くかという体制はまったくできていないのが現状です。何故かと考えると、結局これは、日本が「使い捨て文化」できたからだと思います。点検して維持させるより、壊して新しいものを造る、という方が合理的だと考えてきたわけですが、点検して維持するにはコストもかかりますが、そこにコストをかけるコンセンサスが社会の中に出てこなかったのだと思います。安全に対する取り組み、あるいは環境に対してもそうなのですが、根本的にはわれわれのライフスタイルの問題に関わってきます。ですから、ライフスタイルのキャンペーンとか、あるいは新しいライフスタイルとは何かということを、それぞれの業種で検討されたら非常に良い方向に行くのではないかと、一連の対策の中で感じていました。

岩部 なるほど。規制とか制度の前にライフスタイルに訴え、啓もうする必要があるということですね。それと日本の「使い捨て文化」は、確かに、戦後すべてがスクラップ&ビルドの考え方で進んできましたからね。…ただ、日本の場合、建築に関しても「木と紙の文化」ですね。火災にも弱く、すべて焼失してしまうから、また新しく建てることになる。この辺りがヨーロッパの「石の文化」とは背景が違うということはないのでしょうか。

菅原 それはあると思います。日本では火災はもとより地震、台風とさまざまな災害が起きます。ところがヨーロッパでは災害も日本ほどはなく建物が壊れるということもあまりない。また、冬は寒いから壁も厚く出来ています。ですから、防火、断熱などの技術も発達したと思います。そして、法制的にも商業的にも長命な建物が評価される仕組みが出来上がったのだと思います。日本とはそういう文化の違いがある、という見方は確かにあると思います。

ただ、近年になり、地球環境問題が出てきました。これによって日本もヨーロッパも道はひとつになったと思います。環境問題を考慮した社会を築いていくとなると、いまの日本の「使い捨て文化」がこのまま通用するかどうかという問題があります。いま、それをどう切り替えて行くかという展望はなかなか見えてこないのですが、ヨーロッパから学ぶべきことは結構あるのだろうと見ています。

安易なリニューアルは、環境負荷につながる

岩部 最近の話題ですが、東京都心でも汐留や六本木の大型再開発によって既存のビルが空き室化するという2003年問題が取りざたされ、今後、空き室化したオフィスビルをマンションにリニューアルしようという動きもありますね。

菅原 そうですね。高度成長期にできたビルをリニューアルしようということですが、現実には、現在の耐震基準に合致するかとか、IT対応がどうかなどいろいろな問題が起きています。しかし、その問題をいかにクリアするか、そういう問題解決のビジョンを示すことが必要なんですね。一昔前ですと、それが面倒だからすべて壊して再開発する、ということになるわけです。

その一方で、最近のリニューアルの事例を見ていますと、リニューアルというのが簡単な内外装の取り替えだけを意味しているように見えます。どうも見える部分だけが重視され、中の部品あるいは設備は二次的に取り扱われているように思います。本来は、そういうメンテナンスを伴う形のリニューアルが大事なのであって、内部の設備も一緒に生かす、という考え方が必要です。その場限りではなく、その後何年維持できるかということが重要で、安易なリニューアルが積み重なっていくと、それが大きな環境負荷につながるわけです。

岩部 環境問題まできちんと配慮したリニューアルを実施させるには、何らかの強制力も含めて、誰かがリードしなければならないと思うのですが、その役割はやはり行政に負うところが大きいとお考えですか。

菅原 基本的には必要な人がリードしていけばよいと思っています。そのことを申し上げる理由としては「サービスアビリティ」ということなのですが、いわゆるお客様サービスを最優先するということです。それは御商売をされている企業では当然のことでしょうが、「民」に限ったことではなく、「官」も「学」も同じですが、そういう視点を古（いにしえ）の時代からこれまで歴史的に持ってこなかった。常に上意下達で物事が進んできたわけです。しかし、ここに来て、IT化がそれを急転回させたとは私は考えています。つまり、お客様サービスというものを提供者としてどう考えたらよいのか、何が制約条件としてあるのか、どのようにそれをクリアするのか、ということを一早く察して提供できるかどうかが決めます。

もうひとつは「リピータビリティ」といっていますが、サービスを受けた方が、良いサービスだからまたお願いしたい、という形で評価が継続されることです。こういう仕組みは、他に誰かがやらなくとも独自でできるはずなんです。いずれにしても、提供される側に立った考え方で実施に移すこと、それが鍵を握っていると私は思っています。

IT化によって、誰がリードするかは、それを必要とする人が誰でも提供できるようになったのではないのでしょうか。

大空間の壁に使われるシャッターとドア

岩部 先ほど、ビルのリニューアルのお話が出ましたが、建設市場はフローからストックの時代に移行しています。ストック市場では建物や設備の維持・管理が大きなテーマとなるわけですが、これからの時代の都市や建築の在り方はどう変わっていくのか、その辺りのお話をお聞かせいただけますか。

岩部 先ほど、ビルのリニューアルのお話が出ましたが、建設市場はフローからストックの時代に移行しています。ストック市場では建物や設備の維持・管理が大きなテーマとなるわけですが、これからの時代の都市や建築の在り方はどう変わっていくのか、その辺りのお話をお聞かせいただけますか。

菅原 そうですね。これは、私の持論でもあるのですが、いままでどおりの都市のあり方では、この先、もたないのではないかと考えています。都市の中で自然というものがこれだけ疲弊すると、ヒトを含めた生態系としての営みが崩壊するのではないのでしょうか。といってもこの先すぐということではなく、50年とか100年先のことだとは思いますが。では、ヒトが生存できるゆとりある生態系を考慮した街、あるいは都市に変えるといっても、いきなり既存のものをすべて壊して造り替えるというわけにはいきません。段階的に替えていくことになるのですが、今ある、ひとつの建設技術的手法でいえば「S I」(スケルトンインフィル)の考え方ですね。つまり、建物の構造体はしょっちゅう壊したり造ったりするものではない、大地と同じ…人工の大地ですね。この中に人が住んだり働いたりする場所が組み込まれる。それも使い方が変わったらすぐ捨てるというようなものではなく、変化に対応出来るシステムにするということですね。こういう手法によって、周辺の自然が土地の中に誘導され、次第に融合するという考え方ですね。これを二つの言い方で表現して、一つは「自然に寄生する都市」、もう一つはもっと積極的に「農業都市」と言っています。農産物を街の中でつくるという発想です。

今まで、人間だけが都市に集中し過ぎて、効率性や集中のメリットを追求してきたわけですが、それが自然に負荷を与え、環境問題の発生にもつながったわけです。

岩部 都市を変える最初の手法は、既存の建物の躯体は壊さず、中を組み替えるということですね。

菅原 そうです。その時に、建物の内部に組み込まれるシステムとしてシャッターの存在が出てきます。つまり、大空間とこれを区切る壁ですね。壁になるシャッター、というお話は以前にお話したこともあるかも知れませんが、従来には想定されなかった新しい空間が今後生まれると考えてもよいのではないのでしょうか。そういう観点から、新しいシャッターを考えてもよいわけです。

岩部 壁に相当するシャッターとなれば、耐火性能はもちろん、素材も、例えば木にするとか、丈夫で、デザインにも優れたバリエーションが要求されてきますね。

菅原 これまで日本はやはり一種の「軽量文化」だったと思います。先ほどの使い捨てではないですが、私はそれを「草庵文化」と言っているのですが、いわば、草木で出来ていて造るのも壊すのも実に簡単なんですね。しかし、ヨーロッパなどは、先ほど岩部会長が言われた「石の文化」ですから、とにかく頑丈で壊れない。壊れないこととの関連で金具などもしっかりしている。ドアは壁と同じですから、遮音性も耐火性能もしっかりある、ということになるわけです。リニューアルにも対応できる耐久性のある部品や設備がおのずと発達するわけです。

それから、壁という機能からみると、私はシャッターもドアも同じではないかと考えています。区別する必要はないのではないかと。そういう視点でとらえてみて、協会の進む方向性を考えてみてよいのではないのでしょうか。



「安全であり、かつ安心できるもの」とは

岩部 ありがとうございます。本日は、大変広い観点から菅原先生にいろいろと御教示いただき、興味が尽きないところですが、そろそろまとめということのようですので、最後の話題として、昨年来、当協会でもうひとつの大きなテーマになっているのが防犯ということです。これはまさに「官」と「民」が垣根をなくして合同会議を設置して進めて来ていますが、逆にいえば、それほど防犯の問題が日本の社会で重要になってきたわけであり、安全・安心をどう再構築するかという大きな課題にいま直面しています。

また、安全・安心というのは難しい概念でもあって、例えば、住宅に絶対破られない窓シャッターを設置すれば安心ではあっても、消防が開けられないほど頑丈なものを付けたら、イザとなった時に安全とはいえない。そういう矛盾のような議論もあるのですが、その辺を含めていかがでしょうか

